

睡虎地秦簡《語書》釈文注解(下Ⅳ)

高橋 庸一郎

九、凡良吏明法律令、事無不能毆⁽¹⁾⁽²⁾(也)、有(又)廉絜⁽³⁾(潔)⁽⁴⁾敦慤⁽⁵⁾而好佐上、以一曹事不足獨治毆⁽⁶⁾(也)、故有公心、有(又)能自端⁽⁸⁾毆⁽⁹⁾(也)、而惡與人辨治、是以不爭書⁽¹⁰⁾

凡そ良吏は法律令を明かにし、事に能はざる無きなり。又廉潔敦慤にして上を佐くるを好む。一曹の事を以て獨治するに足らざるなり。故に公心有り。又能く自から端すなり。而して人に辨治するを惡み、是を以て書を爭はず。

(1)凡『説文』に、「最括也、从一、二偶也、从ㄣ、ㄣ古文及」(最括するなり、二に从う、二は偶なり、ㄣに从う、ㄣは古文の及なり)とある。意味はこの通りであろうが、その説解は解し難い。段玉裁附注本『説文』は、「取括而言」となっており、その段注は、「取各本作最、最者犯而取也、非其義今正、取者積也、括者絜也、絜者束也、取括者總聚而絜束之也、春秋繁露曰、號凡而略、名目而詳、目者偏辨其事也、凡者獨舉其大也」(取は各本最に作る。最なる者は

犯して取るなり。其の義を非として今正す。取なる者は積なり。括なる者は絜なり。絜なる者は束なり。取括なる者は總聚して之を絜束するなり。春秋繁露に曰く、號は凡にして略、名は目にして詳なり。目は徧く其の事を辨ずるなり。凡なる者は獨だ其の大を舉ぐるなり)とある。確かに『説文』は最に對して、「犯而取也、从月、从取」とあるが、その犯の意味は判然としない。最字の上部は今日に見えるが牆文では月である。月は『説文』に、「小兒蠻夷頭衣也、从冂、二其飾也」(小兒・蠻夷の頭衣なり、冂に从い、二は其の飾なり)とある。これによつて最が「犯而取也」とされる理由が解る。しかし解にあるように月字は上部を覆う意味である。そうすれば取字の「冠も上部を覆うのであるから、最と取が同義を含んでいる」というは事實である。即ち、最は現在ではともかく、許慎の時代には「覆う」の意味を持っていたであろう。そうすると前に掲げた「孫氏重刊宋本説文」のいう「最括」とは「上から包み込んで全体的にまとめる」の意味で決して不自然ではない。なるほど取は『説文』に、「積、に、積也、从冂、从取、取亦聲」とあり、また積は『説文』に、「積、

聚也、从禾、責聲」とあつて段玉裁が言う「取拏者總聚而聚束之也」の取が總聚に合うようであるが、しかし取は聚にあっているが總には月字を冠した最の方がより適切であるように思われる。しかし「説文」のいう、「从二、二偶也、从ナ、ナ古文及」の点はどうも理解しがたく、それを除けば、「最拏也」も「取拏而言」も意味的には殆んど異なる点はないから、段注にいう「非其義今正」という程のことではあるまいと思われる。更に拏は、「正字通」に、「拏、拏本字（拏は拏の本字）とあるから、この二字は同字と解してよいであろう。『説文』は「拏 聚也、从手、昏聲」とし、聚も『説文』に、「麻一而也、从糸、却聲」とあるからこれ等の点は段注は極めて穏当な解説と言える。しかしここまで来ても、許慎、段玉裁ともに凡字の構造と成立については依然として明かにはされていない。白川静は、『字統』に、「凡は風の声符であり、その省文」とする。しかしこれも凡の字形のその拠つて来る所を説明していない。しかしこれについて康殷は『文字源流浅説』の中で興味深い説を展開している。即ち、甲骨文や金文の凡の字形は、盤器の側視した形であり、それを更に豎に置いた形の簡略形であるとして、「借盤声以为凡、古元輕唇音的F、多读作PB、所以盤凡、鳳鵬、簠庸……等同音。甲文凡形也有些可能算是矢簠、箭架的曲之省形。説文訛作𠂔許氏誤解为「从二、从ナ、ナ古文及字……」近人猜作帆船形、……与許相伯仲。」（盤の音を借りて凡の音に使っているのである。古くは元來唇を軽く合せて出すFの音で、多くはP、やBの音にも読む。故に盤凡、鳳鵬、簠庸……などは同音なのである。甲骨文の凡の字の形

二

はいくらかは矢簠、即ち矢立ての形の省形ともみなされよう。説文では訛つて凡としており、許叔重は誤つて「二に从い、ナに从い、ナは古文の及の字であり……」と解している。最近の学者は帆の形であろうと考えているが、それ等は許叔重とは同じ誤りを犯しているのである」とするのである。矢簠、箭架については些か唐突であるが、堅盤の側視の形というのは声符としては可能性は大である。しかし何故にわざわざ堅の形であり、側視の形であるのかは疑問の残る点である。

(2) 良 『説文』は、「善也、从富省、亡聲」とし、徐鍇は注して、「良甚也、故从富」（良は甚なり、故に富に从う）といっている。富は『説文』に、「滿也、从高省、象高厚之形」（滿なり、高の省に从う。高く厚い形を象どる）とあるものである。『説文』の良字についての説解「善也」に異義を挟む点はないがその後の「从富省、亡聲」はどうも肯首し難い。良の甲骨文字は穀類を飯状にしたものを高杯状の器に盛った形である。ただその高盛の上に二乃至三つ、四つの点が付されているのである。金文では「格伯殷」等に見えるものであるが、或は𠂔である。これは甲骨文の高杯とは全く異なるものである。また漢代の馬王堆帛書では、𠂔或は𠂔とあり、これ等は『説文』の「亡聲」という説解が出て来る根拠となりそうである。しかしこの下部は亡ではなく匕であろう。一般的な説としては、一つの箱をはさんで両側に風を入れ、また風を出す口をつけたもので、これによつて穀の良否を選び分けるとするものである。しかしそれも、甲骨文の字形には合わない。これについても康殷は、「表示豆

中所盛食品放散出香味、其意如下図、後省作、𡗗」(豆中の盛られた食品が香味を放出しているのを表わしている)としこの説は捨て難い。

良吏の語は、漢の晁錯の『上書言募民徙塞下』に、「雖有材力、不得良吏、猶亡功也」(材力有りとも雖ども、良吏を得ざれば、猶お功亡きがごときなり)と見える。有能な官吏のことである。

(3)廉絜 廉は『説文』に、「仄也、从广、兼声」とある。仄は『説文』に、「側傾也、从人在广下、仄牆文、从矢、矢聲」(側傾するなり、人广の下に在るに从う)とあるものである。つまり廉は側の方に傾むくの意である。仄について段注は、「傾下曰仄也、此仄下云傾也、是之謂轉注古與側仄字相假借」(傾き下るを仄と曰うなり。此の仄の下るとは傾を云うなり。是はこれ轉注の古は側と仄の字とは相い假借するを謂う)という。また廉について段注は、「此與廣爲對文、謂偏仄也、廉之言斂也、堂之邊曰廉、天子之堂九尺、諸侯七尺、大夫五尺、士三尺、堂邊皆如其高、賈子曰、廉遠地則堂高、廉近地則堂卑是也、堂邊有隅、有棧、故曰廉、廉隅也、又曰廉棧也、引伸之爲清也、儉也、嚴利也」(此は廣と對文を爲し、偏仄を謂うなり。廉の言は斂なり。堂の邊は廉と曰う。天子の堂は九尺、諸侯は七尺、大夫は五尺、士は三尺、堂邊は皆な其の高さの如し。賈子曰く、廉は地より遠ければ則ち堂は高く、廉が地に近ければ則ち堂は卑し是れなり。堂邊に隅有り、棧有り、故に廉を廉隅と曰うなり。又廉棧と曰うなり。之を引伸して清と爲すなり、儉なり、利を嚴しくするなり)としている。つまり广は家屋殿堂の軒の部分を表わしており、

兼がその音を表わしているということである。兼は金文にも見えるものであるが、矢を二本手で束ねている象形で、合わせ兼ねることを表わしている。尤も『説文』は「并也、从又持禾、兼持二禾、兼持一禾」(并なり。又禾を持つに从う。兼は二禾を持ち、兼は一禾を持つ)と述べて矢ではなく禾であるとしている。これは或いは甲骨文ではこの矢が禾になっているかもしれないということを表わしているが、今のところその甲骨文は見当らない。(下III) 七(2)参照

絜は『説文』に、「麻一耑也、从糸、𠂔聲」とある。つまり麻の草本の一株を指すというのであるが、それは寧ろ後に引伸された意味であろう。𠂔は意味からも音の上でも切に通ずる字素であるから、下部の糸字と合せて糸の一切り、ひと束、ひとにぎりを表わしたものであろう。いま廉絜では意味をなさないから、当然この場合は絜ではなく潔と考えられるであろう。そして絜のもつ、不用な所を切り捨て純粹に麻糸として残った部分という意味に水を加えて、洗ひ清めるの意として使ったのが潔である。絜は音義・字義ともに共通している意味を持つているが、それを水によって更にその意味を定着させ、固定化させているのである。故に絜字も本来潔字と同じ清浄の意味を持つており、『漢書・貢禹伝』には、「禹又言孝文皇帝時、貴廉絜、賤貧汚」(禹又言う、孝文皇帝の時、廉絜を貴び、貧汚を賤しむ)とある。『楚辭・招魂』には、「朕幼清以廉潔兮、身服義而未沫」(朕れ幼くして清なるに廉潔を以てし、身に義を服して未だ沫ならず)とある。

(4)敦慤 敦は『説文』に、「怒也、詆也、一曰誰何也、从支、」とあ

る。詆はやはり『説文』に、「苛也、一曰訶也」とあり、訶は、「大言而怒也」とあって敦とは互訓の關係にある。ただ苛は『説文』には、「小艸也」とだけあって敦にまつわる他の字とは異質である。敦は現代の字書では、あついの意が第一義で、怒や詆（そしめる・とがめる）などの意味はない。これについて段玉裁は、『説文』の敦に注して、「皆責問之意、擻風、王事敦我、毛曰、敦厚也、按心部惇厚也、然則凡云敦厚者皆假敦爲惇、此字本義訓責問、故從攴」（皆な責問の意、擻風、王事敦我に、毛曰く、敦は厚なり。按ずるに心部の惇は厚なり。然らば則ち凡そ敦か厚なりと云う者は皆な敦を假りて惇と爲す。此の字の本義訓は責を問うなり。故に攴に従うなり）としている。攴は、手に棒か鞭を持って打ちすえている象形であるから、段注の言うよう、本義は責問の意であつたと思われる。故に揚雄の「甘泉賦」「白虎敦圉乎崑崙」（白虎は崑崙に敦圉す）の李善注は、「敦圉、盛怒貌也」（敦圉は盛んに怒るの貌なり）とあり、これはその本来の義で用いられているのである。しかし敦が惇の意味つまり厚の意で用いられているのは古く『易・臨』に、「象曰大君之宜行中之謂也、上六敦臨吉无咎」（象に曰く、大君の宜は、中を行ふの謂なり、上六敦く臨むは吉にして咎なし）の王弼の注に、「處坤之極以敦而臨者也、志在助賢以敦爲德、雖剛長剛不害厚故无咎也」（坤の極に處するは、敦を以て臨む者なり。志は助賢に在りて敦を以て徳を爲せば、剛なりと雖ども、剛を長ぜしめば不害にして厚き故に咎无きなり）として、敦を厚と解しているのがそれであろう。また『禮記・曲禮』に、「博聞強識而讓敦善行而不怠謂之

四

君子」（博聞強識にして譲りて敦く善行し怠らず、これを君子と謂ふ）の鄭氏注に、「敦厚也」とある。また『老子・十五』に、「渙兮若水之將釋、敦兮其若樸」（渙として水の將に釋んとするが若く、敦として其れ樸の若く）とあり、その河上公注に、「敦者、質厚」とあるなどがそれである。即ち敦字は非常にはやくから厚の意味に用いられるようになっていたのである。

怒は『説文』に、「謹也、从心、設聲」と説解のついている怒の字である。『荀子・非十二子』に、「其冠進其衣逢其容怒」（其の冠は進む其の衣は逢かに其の容は怒しむ）とあり、怒についての揚雄の注は「謹敬」とある。また同じ『荀子・富国』に、「觀其朝廷則其貴者不賢、觀其官職則其治者不能、觀其便嬖則其信者不怒、是闇主已」（其の朝廷を觀れば則ち其の貴なる者は賢ならず、其の官職を觀れば則ち其の治める者は能ならず、其の便嬖を觀れば則ち其の信なる者は怒ならず、是れ闇主のみ）とあってその揚雄の注には、「便嬖左右小臣寵幸者也、信者不怒所親信者不願怒也、主闇故姦人多容也」（便嬖は左右の小臣にして寵幸さるる者なり。信ぜらるる者は怒ならずというのは親しい所の信ぜらるる者は怒なるを愿わざるなり）とあるから、この場合の怒は、発音の同じ確と同じ意味で、誠実、忠誠の意であろう。即ち故は『説文』に、从上擊下也、一曰素也、从攴、言聲」とあるように、その字形はある固い物をハンマー状の物で打っている象形である。言は打つても壊れない固い外側のカラを言うのであろう。それは中心に凝り固った固い純粹なものを表わす穀や古、固とも音の上からも通じている。「一曰素也」とは

まさしくこの外側と中心との固いものという二つの意味の同質性を示唆していると言える。

敦慤の語は、『荀子・王霸』に、「商賈敦慤無詐、則商旅安、貨通財、而國求給矣」(商賈敦慤にして詐すること無ければ、則ち商旅は安じ、貨は財に通じて國は給を求む)とあるに見える。また『管子・君臣上』にも、「雖有敦慤忠信者、不得善也」(敦慤、忠信なる者有りとも雖ども、善を得ざるなり)と見える。

(5)一曹事 曹は『説文』に、「獄之兩曹也、在廷東、从棘、治事者从曰」(獄の兩曹なり、廷の東に在り、棘に従う、事を治める者は曰に従う)とある。これに徐鍇は注して、「以言詞治獄也、故从曰」(言詞を以て獄を治むるなり、故に曰に従う)という。この曰は言詞を表わすのではなく、恐らく白川靜の言う盟誓の辞を収める器の象形であろう。この曹について段玉裁は、「兩曹今俗所謂原告被告也、曹猶類也、史記曰遣吏分曹逐捕、古文尚書、兩造具備、史記兩造、一作兩遭、兩遭兩造即兩曹古字、多假借也、曹之引伸爲羣也羣也」(兩曹は今俗に謂う所の原告、被告なり、曹は猶お類なり、史記に曰く、吏を遣わし曹を分け逐うて捕えしむと、古文尚書の兩造具備を、史記は兩造、一に兩遭に作る。兩遭、兩造は即ち曹の古字、多く假借なり、曹の引伸されて羣、羣となるなり)という。白川靜は更に曹字の従う東とは橐つまり袋のこととし、それに裁判に必要とされる束矢鈞金を入れるものとする。即ち原告被告両者の東がそろい、宣誓の器曰が具って裁判が成立する。その状態を曹というとする。曹については様々な考え方があり、例えば康殷は、「釜中烹

煮二『東』之状。東的初意未能肯定、初步研究概象禽鳥胴体、或某種植物根塊之形、而古書國之名、即以此类生産以為標榜」(釜の中で二つの東、即ち鳥の胴体や植物の根を煮ている形、古代にあった曹という国の名は、こうしたものを生産し、それを看板にかかげたのである)とし、更に康殷は、許叔重が釜の形を訛って曰字と解し、またその説解、及び徐鍇の補説などは全く「荒唐無稽」の説であるとしている。しかし康殷の釜で二鳥を烹るというのも全く荒唐無稽と言えなくもない。やはり段玉裁、白川説の方が穏当と言えるであろう。曹は以上のように原初的には裁判そのものを言った語であったが、後に裁判、治獄の事を掌る役所、或いはそれにたずさわる役人を言うようになり、更に役所関係全般についても表わすようになったのである。『後漢書・百官志』に、「成帝初置尚書四人、分爲四曹」(成帝初めて尚書四人を置き、分けて四曹と爲)とあるなどがその例である。しかし曹が法曹関係以外の役所、役むきにも用いられるようになった時期は定かではない。『単行本』の注には、「曹、古時郡、县下属分科亦事的吏、称为曹、如賊曹、糞曹等」(曹は、むかし郡や県の下に属しているそれぞれの分課で事を処理する役人を曹と称した。例えば賊曹、議曹などがそれにあたる)とある。賊曹は『通典・職官五』に、「漢成帝時、尚書初置二千石曹、主郡國二千石、又置三公曹、主斷獄。後漢光武、改三公曹主歲盡考課諸州郡政、二千石曹掌中都官水火、盜賊、詞訟、罪法、亦謂之賊曹、重於諸曹」(漢の成帝の時、尚書に初めて二千石の曹を置き、郡國二千石を主らしむ。又三公曹を置き、獄を斷ずるを主らしむ。後漢光

武は、三公曹を改めて、歳盡、考課、諸州の郡政を主らしむ。二千石の曹は、中都を掌り、水火、盜賊、詞訟、罪法を官す。亦た之を賊曹と謂い、諸曹より重す」とあるものである。また議曹も、『漢書・龔遂傳』に、「爲渤海太守數年、上遣使者徵遂、議曹王生願從」(渤海太守と爲りて數年、上使者を遣わし遂を徵す。議曹の王生從うを願う)とあり、地方郡守の屬吏を言うのに使われている。この『語書』の發布された秦の時代に曹が衙署、屬吏を表わすものとしてどこまで一般化していたかはつきりしないが、まだ曹の原初的な意味を残していたのではなからうか。そうすれば下文に見える四例の曹も、この『語書』という法令に密着した解釈が可能であろうと思われる。故にこの一曹事というのは、詞訟・罪法・治獄についての処理扱いの意と解せよう。

(6) 不足 ここでは不可能の意味である。『荀子・正論』に、「淺不足以測深、愚不足以謀知」(淺きものは以て深きを測に足らず。愚きものは以て知を謀るに足らず)とある。

(7) 公心 公正なる心、ここでは飽まで法に照した上での公正な心のことである。『尸子・上』に「自井中觀星、所見不過數星、自丘上以望、則見其始出也、又見其入、非明益也、勢使然也、夫私心井中也、公心丘上也」(井中自り星を觀れば、見る所數星に過ぎず、丘上より以て望めば、則ち其の始めて出ずるを見るなり、又其の入を見るなり、明の益すに非ざるなり、勢の然ら使むるなり、夫れ私心は井中なり公心は丘上なり)とある。この『語書』では、荀子の丘上とは上の下した法律令ということになる。

(8) 端 前掲注参照

(9) 惡 『説文』に、「過也、从心、亞聲」とある。段注は、「人有過曰惡、有過而人憎之亦曰惡、本無去入之別、後人強分之」(人有過るを惡と曰う、過有れば人之を憎み亦惡と曰う、本と去入の別無く、後人強いて之を分つ)とする。亞は『説文』に、「醜也、象人局背之形、賈侍中説以爲次第也」(醜なり、人の背を局するの形に象る、賈侍中説くに次第と爲すを以てするなり)とある。局は曲と音通でまがるの意であるから、亞は人が背中をまげている形とするのである。しかしそれは恐らく違うであろう。金文に見える図象標識にはこの亞字形を使ったものが非常に多い。これは墓室におかれた棺槨を象どったものである。醜は『説文』に、「可惡也、从鬼、酉聲」とある。即ち酉は音を表わしたものであるから、醜の意味は鬼字に有る。その鬼は『説文』に、「人所歸爲鬼、从人、象鬼頭、鬼陰氣賊害、从厶」(人の歸する所を鬼と爲す。人から从ひ、鬼頭に象ぐる。鬼は陰氣にして賊害す。厶に从う)とある。つまり亞字について『説文』が言う所の醜とは鬼のことであり、鬼は死者を意味する。即ち亞はその中に鬼を納める所であるが故に醜と言われるのである。亞が忌み嫌われるものであるから、それに心字を附加して、段注に言うように憎むの意に用いられるのである。

(10) 辨治 辨は『説文』に、「判也、从刀、辨聲」とある。また判は同じく『説文』に、「分他、从刀、半聲」とあるものである。辨の音は半、分、班などに通ずる音で分ける意である。そして『説文』は、辨の字解として、「舉人相與訟也、从二辛」(舉人相い與に訟す

るなり、二辛に从う」とする。しかしここには𠂔字が分、半の意を持つとは書かれてはいない。班について『説文』が、「分瑞玉、从珏、从刀(瑞玉を分つ)」という解を与えているからには𠂔字についても、辛を分つなどに類する解があってもよさそうな気がする。その点を康殷は、「象用刀劈分牲体为两片之状、这𠂔形乃牲畜、獸形的一種省説形、(刀を用いて犠牲として奉げた家畜を刀できりさばいて二体とした形、この辛は犠牲の家畜を表わしており、それは獸形の一種の省略された形であり、𠂔った形である)」と述べている。つまり以上の与説を整理すると次のようになる。先づ半、分、𠂔、班の各字に共通する音があり、その音は分けるの意味であった。そしてその分ける場合の違い、材料の違いによってそれぞれの別の作字がなされた。獸を分ける場合は𠂔、玉を分ける場合は班、牛を分ける場合は半、物一般を分けるのを分、という具合である。その後これ等の文字は混用され、それ等の文字の持つ意味は拡大され、引伸されたのである。以上のような生成の過程は他の多くの漢字についても極一般的に見られる現象である。こうした変化の過程の中で偏傍が更に添加されて一層複雑な意味の重複と相違が生じて来たのである。

治は、『説文』に、「水出東萊、曲城陽丘山、南入海、从水、台聲」(水は東萊の曲城陽丘山に出でて、南して海に入る。水に从い、台聲)とある。段玉裁は注して、「今治水名小沽河」(今治水は小沽河と名づく)とし、その地理上の位置を詳しく説明しているが、治がもつおさめるの意味との関係については言及していない。治は、『説

文』にいうように台声である。台は金文では以と共通する音である。以はひきいるの意を持つている。即ち治とは水を自由に流れさせるのではなく、ひきい導いて一定の流れに押えこむことである。康殷は、「从台即𠂔、𠂔的省転、本意即為治理、後又从水或有治水之意」(治字は台に从っている。台は𠂔、𠂔字の省転であり、本の意は治め理めることである。後に水に从うようになって治水の意味も生じるのである)と述べている。この説も極めて興味深いものである。『周礼・天官』に、「聽其治訟」(其の治訟を聴く)とあり、孫詒讓は、「凡咨辨陳訴請求必有𠂔、故治亦曰𠂔」(凡そ咨辨し、陳訴請求するは必ず𠂔有り、故に治亦た𠂔と曰う)と言っており、また郭沫若も治と𠂔とは同じ意味を持つといい、于省吾も、「金文治字均作𠂔」(金文の治は均しく𠂔に作る)といっているからである。𠂔字の𠂔は乱れた糸を解きほぐし正状に戻すという意味を持つている。司はその音を表わしているよう。即ち治と𠂔(𠂔)のもつ音はもとと共通で、ひきいる、おさめるの意味を持っていたのが二方面からその場合に應じて文字化されたのであろう。

𠂔治について「単行本」は、「分治、与上文独治意近」(分治の意、上文に見える独治(独断専行)と意近し)と注している。しかしこの𠂔治と独治が何故に同意に考えられるか理解しがたい。全く反意と取る可能性もあろう。この「単行本」は、お互いに縄張りを作つて干渉せず、干渉されずという態勢で政治的処理を行うということなのであろうが、しかしおさまりは些かよくない。

(1) 争書 この書を普通書、即ち文書、文字、などと解すると意味が

通じない。恐らく他字の音通として用いられたものであろう。『單行本』も「書、疑讀为署、処理事務」(書は署と読むのかもしれない。即ち事務を処理することである)と注している。今の所他には考えようがない。追って考うべしというところか。

訳文

すべてのよい官吏というのはみんな法律令によく通じているものであり、事務上処理出来ないものはない。清廉潔白で忠誠心が高く、真面目で、よく上の為に力を發揮するのである。彼等は一つの事務処理に当たっても独断専行してはいけないということを知っており、その故に公正な心を持っているのである。また自分を正しく導くことが出来、また縄張り意識を捨てて、他の部署の人達とも相談しながら処理していく、しかも決して事務処理上のことで他人や、他の部署とは争わないのである。

八臣使卿驛律ノ愛釋不能敵

身麻絮敵敵而ノ野雁上

ハ一書史不正場治敵敵身公ヤ書能日

ハ端敵而愛釋ノ野雁是ハ不身書

(一九九三年七月十二日受理)